

---

# お花見に行こう

R A N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お花見に行こう

### 【Nコード】

N8532V

### 【作者名】

RAN

### 【あらすじ】

家族揃った休日のある日、父耕助が突然「お花見に行こうか」と言い出す。

戸惑いながら、耕助の運転する車に乗って出かける白河家+理紗。

dノベ転載 「惑う星達」番外編

(前書き)

「惑う星達」の番外編です。

「お花見に行こうか」

白河家大黒柱の耕助が突然そう言い出した。

「……え？」

いきなりのことで、その場にいた瞭、由実、理紗は一瞬固まった。何と言えばいいのかわからなかったのだ。

「あら、いいわねー」

そこへ京子が皿洗いを終えて、エプロンをたたんで、リビングに  
来た。

「だろ？ 陽気も暖かくなってきたし、桜もちょうど見ごろだろう  
し」

耕介は京子に嬉しそうな顔を向けて言った。

「そ、そうですね。みなでお花見したら楽しそうですね！」

理紗が京子に合わせるように言葉をのせる。

「そうか、理紗ちゃんもそう言ってくれるか。それじゃあ、さっそく明日行こうか」

「明日ー?!?!」

由実と瞭が大きな声で揃って言った。

耕助は不思議そうな顔をして二人を見た。

二人は互いに互いの口を押さえて、ただ笑う。

「な、何でもない。あ、明日か……。た、楽しみだなー……」

まるで心のこもらない台詞で由実が言った。

「そ、そうだね……」

瞭もとりあえず由実に合わせておく。

「そうか、それなら明日でかけることにしよう。ちゃんと準備しておくんだよ。京子、お弁当よろしくね」

耕助は嬉しそうに話す。恐らく、現在彼の頭の中で明日の計画が練られていることだろう。

瞭と理紗と由実は、耕助にわからないように、側に寄って、ひそひそと話し出す。

「ちょっと大丈夫なの？ あたし知らないわよ？」

「っていうか、俺らの予定全く無視だよ。だいたい、由実姉の楽しみだなーが決め手になったんだろうが」

「ってかき、何でいきなり花見とか言い出すの？ なんかそんなテレビとかやってたの？」

「そりゃこの時期になりゃニュースとかでだって桜咲いたとか話題になるだろうが」

「……お花見って、去年とか特になかったですよ……？」

理紗が根本的なところを正すと、二人はうーんとうなって、黙った。

「……ああ、ゴールデンウィークにちょっと実家にでも帰って来ようなんて思わなきゃよかった……。理紗ちゃんの顔見てすぐに帰れ

ばよかった……。父さんの思いつきって突飛すぎていつもついてけないのよねー」

よよーと由実が理紗によりかかる。理紗はそれを素直に受け止める。

瞭はあきれたような苦笑いをうかべながら由実を見る。

「ってかさ、由実姉実家に帰ってきすぎなんだよ。休みつてなかったら帰ってきてるだろ。一人暮らしの意味全然ねえじゃん」

「だってー、こんなかわいい理紗ちゃんがいるんだものー。そりゃちよっと無理してだって帰ってきたいわよー」

「あー、理紗にひつつくんじゃねえよ！ うざいやツだな！」

「理紗ちゃんはずいなんて言わないもーん。あんたヤキモ子焼いてんの？」

由実がニヤニヤと笑って言うと、瞭は顔を、遠目でもわかるくらい真っ赤にした。

「バ、バカヤロー！ あー！ 俺はもう部屋に戻る！」

そう言うと、瞭はドンドンと足音大きく二階に上がり、自室へ下がってしまった。

由実はニヤニヤしながら、去り行く瞭を眺めていた。

「もう、告白したくせに素直じゃないよねー、アイツ。理紗ちゃんも苦労するわー」

「そ、そんなことは……」

理紗は少し照れたような、はにかんだ笑顔で返す。

なんか話題がズレたような、ということとは、この際気にしないでおくことにした。

そして翌日、白河家＋一名でお花見に行くことになった。

理紗が菜々恵に伝えたら、菜々恵もぜひ行きたいということでもメンバーに加わったのだ。

着々と進められていく準備を、由実と理紗と瞭、菜々恵も不安げに見ていた。

五段はあるだろうか、大きなお弁当、その他飲み物など、耕助も京子もご機嫌で荷物をたくさん車に積んでいる。

「よし、準備万端！ みんな、車に乗りなさい」

そうして、白河家＋一名のご一行様は出発した。

もうどれくらい経っただろう。

何時間も、というわけではないが、少なくとも一、二時間は経過しているだろう。

延々と続く木々の道を抜け、たまに町を見下ろす場所も通り、ここが山の中だと知る。

開けていた窓からは緑の爽やかな匂いの風が入り込み、春の訪れを感じさせた。

長い冬を越えて訪れる春は、嫌でも人の心を軽くさせる。

皆、嬉しそうに外を眺めていた。

そうしていると、急に開けた場所に出て、そこで車も止まった。

「さあ着いたよ。みんな、降りてみなさい」

耕助が嬉しそうに、後ろにいる子供達を振り返った。

その彼らは車を降りて、辺りをキョロキョロと見回す。

そこからは町を見下ろすことができ、仲間はずれのように、一本だけ桜の木があった。

耕助と京子は、嬉しそうに荷物を運び出し、桜の木へと向かっていった。

理紗、瞭、由実、菜々恵も、車から荷物を取り、耕助、京子に続いて桜の木に運んでいく。

シートを敷き、お弁当などの荷物をその周りに置く。

ちょうど時間も昼食にするにはいい頃合だった。

京子は相変わらずにこにこ笑いながら、弁当の包みを開けていった。

理紗はそれを見て、紙コップを用意して、飲み物をついでいく。由実と菜々恵はお皿を揃えていった。

男性二人組みは、中に入ることができず、それを見守っていた。たまに、耕助が、お弁当楽しみだなーなどと言いながら。

そうして、昼食の準備は進められた。

たまに、風がなびき、サワサワと草や葉がこすれる音を横に聞き、桜の甘い匂いがほのかに香る。

その桜の下で、昼食を食べ始めた。

前日から準備をして、朝早く起きて仕上げたお弁当はおいしかった。

外で食べるというのも、またその味をさらに引き立たせた。

皆喜んで食べ、ある程度お弁当が片付いた頃、京子は傍らから布に包まれた何かを取り出した。

「ねえねえ、みんなこれ飲んでみない？」

その言葉と形から察するに、布に包まれているのは、何か飲み物の入れ物なのだろう。京子の両手におさまるぐらいの瓶のように見える。

「何それ？」

由実が興味津々という顔で京子に聞いた。

「んふふー。とりあえず飲んでみましょう」

京子は嬉しそうにそう言うと、次々と皆のコップにその液体を注いだ。

コップに注がれた液体を覗くと、黄金色に輝いていた。

匂いは 甘く芳しい。おいしそうないだ。



「じゃあ、いただきますーす」

一番興味を示していた由実が一番手を切る。

それを見た菜々恵、理紗も口をつけ、瞭も恐る恐る一口飲んだ。耕助と京子も、それを見てコップに口をつけた。

「うーん、おいしい！ これ何？ 果物みたいな味するけど」

由実が一気にその液体を飲み干して、京子に問う。

「あら、由実ちゃんもう飲んじゃったの？ これ実はちょっと奮発して買ってきた果実酒なのよ」

その京子の言葉に、瞭と菜々恵は咳き込んだ。

「さ、酒かよ!？」

瞭はコップを置いて、京子を見る。

「お、おばさん、未成年にお酒を勧めるのはどうかと……」

菜々恵も変なところで真面目で、苦笑いを浮かべていた。

「大丈夫よー。フランスでは子供の頃からワインを飲んでるんですってよ。」

節度を持って飲めば、お酒も健康につながるのよー」

「いや、そういう問題じゃなくて……」

「もう、男が細かいことグダグダ言うんじゃないっての！ 母さん、もう一杯ちょうだい！」

「はいはい」

京子はしょうがないわねーと言いながら、由実に酒を注ぐ。

由実は酒好きだった。

そうして、未成年の飲酒問題は何事もなく済まされてしまった。

瞭と菜々恵は互いをちらりと見て、どうしたらいいものかと悩んでいたが、ふと先ほどから黙っている理紗が気になって、理紗の方を見る。

「理紗？」

瞭が理紗に声をかけてみる。

「ん？」

理紗は笑顔で瞭の方を振り向く。

別に問題はない。だが、何か違和感があった。

菜々恵もそれを感じ取り、理紗の側に寄る。

「理紗、大丈夫？」

理紗の肩に手を置き、その顔を覗き込む。

「いやらなー、菜々恵、何れもないよー」

「！！！」

理紗のその言葉に、瞭と菜々恵は凍りついた。

いや、由実の耳にも届いており、理紗の方を向いて固まっていた。舌足らずな言動。よく見ると顔もほんのり赤い。そうそれは。

「理紗、酔ってる………？」

「酔ってませんー」

だいたい酔ってる人はこういうものだ。

明らかにテンションが通常時の理紗ではない。

瞭と菜々恵は、互いに顔を見た。その顔には、明らかにどうしようか、と困惑した表情が出ていた。

由実も、その言動を聞いてしまったけれど、遠くから見守るしかなかった。

「り、理紗、車で休もうか………？」

瞭が恐る恐る理紗に問う。

「嫌らー。ここでみんなといるのー。桜見るのー」

理紗が瞭にぎゅーっと抱きついた。

それはここから離れないという意味表示なのだろうが、瞭にとっ  
てはそれどころではなかった。

「り、り、りり理紗……?!」

突然のことに頭は混乱状態。瞭も動揺してしまった。

「落ち着きなさい！ 瞭！」

菜々恵がそんな瞭を怒鳴る。

「う、うるさい！ だ、だってなー……」

瞭は激しく動揺して、理紗よりも顔を真っ赤にしていた。

体は硬直して、口しか動いていない状態だ。

すると、理紗の体がずれた。

瞭は慌てて理紗を受け止める。

すると、理紗の静かな呼吸が聞こえた。

「……寝た……?」

瞭は理紗を抱えながら、誰ともわからず問う。

「……みたいね……」

それに菜々恵が答えた。

理紗は静かに寝息をたてて、気持ちよさそうに眠っていた。

由実も寄ってきて、とりあえず理紗を車の中に入れることにした。

理紗が瞭から手を離さないなので、瞭が抱えて車に運ぶことに。

瞭だけに任せられるか、と菜々恵と由実も一緒についていった。

その様子を、京子と耕助は笑顔で見ている。

「京子も、酒を飲ませるなんて悪いヤツだなあ」

「それを言うのはちよつと遅いんじゃないの？」

「でも、みんな楽しんでくれたみたいでよかったよ」

「やっぱり今のうちにお酒の味ぐらい覚えておかないとねー」

「いや、そういうことじゃないんだけど……。……まあ、いいけど。」

「……そういえば、この桜の覚えてる？」

耕助の言葉に、京子は笑みを深くして、答えた。

「当たり前じゃないの。よく覚えてるわ、あの時のこと」

誰が忘れるものですか。

口には出さず、心に押し込める言葉。

耕助は笑みを深くした。

「そう、それならよかった」

二人の間だけにあるつながり。

今あるこの穏やかな時も、いつも隣にいてくれる人がいたから。

「……あの時のこと考えると、こんな風になるなんて思ってなかった」

「俺もだよ」

耕助の顔から、父親である彼の色が消えた。

「幸せね。私達って」

「身に余るぐらいだね」

二人は一瞬黙る。

どちらからともなく、静かに目を閉じ、桜の匂い、すれる音を感じた。

「……何で急にここに来ようと思ったの？」

京子が少し目を開いて、手元にあるコップを見つめたまま言った。

「……なんとなく」

耕助も目を開き、その目は京子とは逆に上の、桜の花を見ていた。

「……そう。あなたはいつもそうよね」

嫌味ではなく、素直に出る言葉。

耕助も京子も、ずっと笑顔のままだった。

桜はただ、風になびく。

RAN

\*\*\*2006/5/2\*\*\*

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8532v/>

---

お花見に行こう

2011年8月17日03時32分発行